はじめに

発展途上国と呼ばれるアジアやアフリカの国々を特徴づけるのは「貧困」である、と普通は説明される。その解決のためにさまざまな「開発」が実施されてきた。20世紀後半の世界を特徴づけたのはまさに開発の世界的広がりであったともいえる。さらに過去10年ほどの間で世界の各地の出来事は他の地域に急速に影響するようになり、各種の意味でグローバル化が進行してきた。

このような状況下において、先進諸国と途上諸国の間の政治的・経済的格差である南北問題を議論することは、以前にもましてその意義を増している。なぜなら、途上国の貧困は途上国の人々にとっての苦難であるだけではなく、全世界的課題であるからである。

くしくも、本書が刊行されるこの2005年は世界の貧困問題にとってきわめて重要な年である。それは本書で詳しく説明するように、2000年に採択されたミレニアム開発目標（MDGs）は2015年までに世界の貧困を半減することを目指している。採択から５年目の2005年には、国連を中心にこの目標の達成可能性が評価される。それを受けて、世界の貧困問題に関して新たな議論が展開されるからである。

その意味で貧困の解消を目指す「開発」は理論的に真摯に探求されなければならないと同時に、実践的にその解決方法が求められている。国際開発研究はきわめて実際的課題であり、机上の空論では無意味である。

また日本は、先進国として、貿易立国の国として、しかるべき責任を負う。あるいは日本に住むわれわれにとっては、地球市民の一員として、「アフリカではなく、日本に生まれて幸運であった」という意識から脱却し、問題解決の

ための学習の必要性も意識されなければならない。

しかしながら日本では新聞やテレビもミレニアム開発目標（MDGs）に関してあまり取り上げていない。それどころか21世紀の貧困と開発の全体を展望するような開発研究の体系的書籍はいまだ刊行されていない。このように聞くと驚かれる読者もあるであろう。日本で近年「開発経済学」と銘打った書籍はいくつも刊行されている。ところが開発というテーマを学際的視点から、なおかつ体系的に一人の著者が記述した書籍は見当たらない[1)]。

途上国の社会がいかに変化するかについて総合的に考察するためには、経済的分析は必要であっても決してそれだけでは十分ではない。なぜなら経済成長を何の疑いもなく肯定するというよりも、成長の質や恩恵の分配のあり方が問われる必要があるからである。そうなれば、開発をめぐる価値・価値観の問題が必然的に伴うが、従来の経済学は必ずしも、自尊心やアイデンティティーの問題を主要な関心とはしていない。また開発を本書で見るように究極的には人間にとっての自由の充足ととらえるにしても、自由としての開発がどのような選択の可能性を導き出すのか、また自由と自己実現がどう関連するのかは経済学的視点から十分に考察されているとは言い難い。

私は龍谷大学国際文化学部に1996年に着任以来、国際開発論を主に学部生向けに講義してきたが、その間ずっとこのような体系書がないことに悩まされつづけていた。そのため、大学の教員となって10年目の節目にあたる本年に、この書物を世に問うことにした次第である。

以上のような背景から生まれた本書の一つの目的は大学・大学院の授業においてできる限り汎用的に使えるオーソドックスな「教科書」としての役割を果たすことである。本書は開発を理解するうえで必要な諸課題をバランスよく取り上げようと試みたので、大学の３・４年生ならびに大学院での演習にも価値があると考える。

本書刊行の第二の目的は開発研究の確立への試みである。「開発研究」はヨーロッパとりわけイギリスでは development studies として定着しているが、

１）先駆的研究としては斎藤優［1995］がある。

日本ではこのような課程が開設されたのはようやく1980年代以降のことである。開発研究者の集まりとしての日本国際開発学会が設立されたのも15年前の1990年と比較的新しい。おりしも同学会の15周年記念事業として５巻からなる『シリーズ国際開発』が日本評論社より逐次刊行されているが、開発研究という分野自体がようやく定着しつつある時期であるといって差し支えないであろう。このような時期に開発研究の全貌解明を試みることは時宜を得たものであると思われる。そのために、本書では現在の開発研究の内容を、できる限り水準は落とさずに、なおかつ読みやすく書くことに努力した。とりわけ本書は生計アプローチという立場で一貫して貧困と開発を議論しようと試みている。読者は開発研究の到達水準を垣間見ることができるものと期待している。

また、開発研究が独立の学問分野として成立しうることを確認することは[2)]、途上国と先進国の間で実施されるさまざまな国際協力の実践的要請に応えるためにも意義ある作業であると考える。

さらに、本書が読者に提起したい第三の目的は、開発研究の当事者性である。すなわち、発展途上国諸国と本書を読まれる読者は一見別の世界に住んでいるように思われる。しかしそれは決して事実ではない。われわれは食糧の多くを途上国から輸入することで生存している。またわれわれ自身の生産物も世界の各地に及んでいる。またわれわれの考えが、直接・間接に他の地域の人々の幸せに結びついている。仮に本書によって貧困と開発に関連する諸問題への理解が進んだとして、現実の諸問題への解決にどのように役立つのであろうか。学問の当事者性とは、国際開発論を学ぶ人々が「人ごと」としてではなく、「わがこと」として、自己実現のあり方に関して考えることである。そのような意識が芽生え、自分自身の生活行動が変化しない限り、世界の貧困問題は解決しないであろう。

他方、本書の限界に関してもあらかじめ記しておきたい。まずこの本の独自

2）無論、学問分野として開発研究が成立することと、どのような開発をも肯定することはまったく別のことである。言い換えれば開発の内容はさまざまな面から批判的に考察されなければならないことはいうまでもない。

性を明確にするために、経済分析はあえて必要最小限の記述にとどめた。経済分析についてはすでに書かれている開発経済学の優れた文献を参照していただきたい[3)]。

また記述はできるだけ平易にわかりやすく行うことを心がけたが、第二次世界大戦後の政治的・経済的変化をすべて解説することは本書の目的ではないので、個別の説明が難しいと思われる読者は、適宜さまざまな参考資料を見ていただければ幸いである[4)]。

無論、目次を見るだけでもわかるように、本書の内容は多方面にわたり、私の理解が十分ではない個所は少なくないであろう。総合的考察を試みる反面、一つひとつの領域の理解はその分野の専門家には及ばないことを自覚しつつ、私の意図がどの程度実現されているかは、読者の判断を仰ぎたい。

さらに、本書ではインターネットにある有用な情報源をできる限り脚注で表記した。確認には十分注意しているが、インターネットは変化の激しい空間であるので、出版準備の過程で変更されている場合はご容赦願いたい。

＊　＊　＊

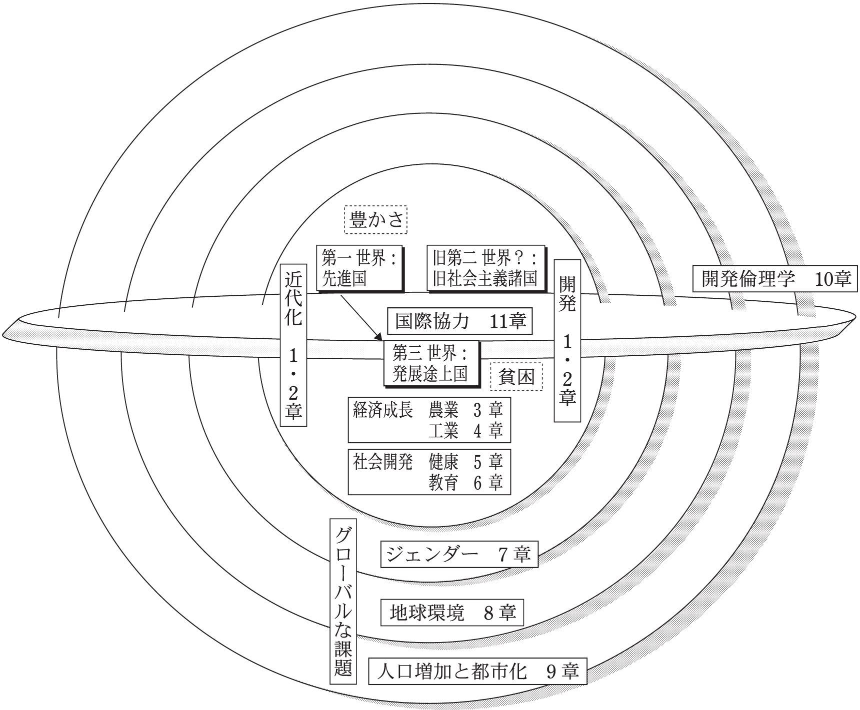
以下に本書の構成について簡単に説明をしておこう（図参照）。第１章では開発とは何かに関して導入的考察を行う。開発主義は第二次世界大戦後のさまざまな状況によって生み出され、変容していった。途上国の貧困の解消を目指す開発は正義であるとされるが、開発研究が普遍的な学問であるかどうかという問題も提起する。

途上国の開発は先進国での近代化の経験を生かそうとした取り組みであるが、第２章では開発をめぐる異なった立場を概観する。違いは主に資本主義をどうとらえるかの差に起因する。そのうえで、ミレニアム開発目標（MDGs）やそれを実現するための現在の仕組みの長所・短所について考察する。

３）比較的最近刊行され、なおかつ優れた開発経済学の書籍としては、渡辺［2004］；ジェトロ・アジア経済研究所編［2004］がある。

４）たとえば野林ほか［2003］；田中・中西編［2004］を参照。

図　本書の構成



第３章と第４章では、経済活動を活発にすることで貧困を解消するための経済開発を扱う。第３章では農業を、第４章では工業を、それぞれ取り上げる。両者ともに生産を近代化することが試みられた。農業では緑の革命が、工業では輸入代替や輸出志向の工業戦略がとられた。そして、それぞれの試みは、成功と失敗の両側面をもっている。

第５章と第６章では人間の能力を開花させることを重視する社会開発を取り上げる。今までの経済成長重視の考え方はしばしば人間を経済に隷属させてきたとの反省から、人間中心の開発を模索するなかで、とりわけ健康であるための保健や医療（第５章）、また知識を得たり人格を形成するための教育が重要であると思われるようになってきた（第６章）。もちろん、社会開発は経済成長に取って代わるのでなく、両者は同じ目的に向かって進む車の両輪のような

関係にある。

第 7 章から後の 3 章では、地球的規模の課題に関して取り上げる。第 7 章ではジェンダーに、第 8 章では環境に、第 9 章では人口増加と都市化に、それぞれ焦点を当てる。これらは地球的規模の課題のほんの一握りにすぎないが、途上国・先進国を問わず、それぞれの国々がおのおの責任を全うしなければ問題はいずれも解決しない点で、人類にとって重要な課題である。

第10章では新しい言葉である開発倫理学を用いて、開発とは何かについて再度考察する。意図した開発が失敗するなど、過去の経験は開発をめぐる議論を熱くしてきた。そのなかには開発が倫理的に見て正しいかどうかという根元的問いかけが含まれる。図においては開発倫理学はすべてを横断するように描かれているが、その意味は開発のあり方の再考にある。

第11章は通常、先進諸国と途上国の間で実施される国際協力の概要を説明する。政府間で実施される ODA や市民団体が活動する場合など、多様な事例と、さらに近年の援助での重要テーマである人間の安全保障や平和構築についても説明する。

最後に第12章では短く結論として、ミレニアム開発目標（MDGs）の達成への課題、途上国のなかでもとりわけ深いアフリカの苦悩、日本の経験を途上国支援に生かす重要性を考察し、本書を締めくくる。